

平成29年度病害虫発生予察指導情報

対象病害虫：イネ・稲こうじ病

平成29年12月15日
鳥取県病害虫防除所

平成29年は一部の地域においてイネ稲こうじ病の発生が認められた。本病の多発ほ場では、平成30年以降の発病リスクが高いため、適切な対策を行う必要がある。

1 平成29年度のイネ稲こうじ病の発生状況

平成29年は一部の地域において中生品種を中心に多発生ほ場が散見され、精米時に病粒が混入し、白米の着色がみられた事例もあった。本病の多発生要因として、出穂期前が低温、多雨で経過したことが考えられる。



図1 稲こうじ病の発病穂



図2 玄米に混入した病粒



図3 病粒が混入した玄米の精米による白米の着色（左：無発病ほ場の白米、右：無発病ほ場の玄米に病粒（10個/粳1kg）を人為的に混入し、精米した白米）

2 イネ稲こうじ病の発生生態

イネ穂の籾に暗緑色の病粒を形成する。病粒の約半数が収穫時までに土壌表面に落下する。病粒中には多量の厚壁胞子が含まれており、翌年にイネが移植されると厚壁胞子が発芽する。発芽すると菌糸はイネの根から侵入して生長点に達し、出穂前までに穎内に侵入すると考えられている。本病の発生意因は以下のとおりである。

(1) 耕種的要因

- ・ 耐病性の弱い品種（主に飼料用米専用品種）の栽培。
- ・ 中生品種、晩生品種の栽培。
- ・ 窒素肥料の多施用。
- ・ 山間地等の日照不足になりやすいほ場。
- ・ 過去に本病の発病がみられたほ場。

(2) 気象要因

- ・ 幼穂形成期～出穂期の低温、寡照、降雨。

※発病には気象要因が大きく影響するため、発病程度の年次変動が大きい。

3 イネ稲こうじ病の防除対策

(1) 薬剤防除

発病後の防除は困難であり、予防防除が基本となる。また、本田散布剤で防除を行う場合は、他の病害の防除適期と異なることが多く、防除適期が限られるため、散布時期に注意が必要である。防除効果は銅剤が最も高い。シメコナゾール剤の育苗箱施用剤（トリプルキック箱粒剤）や本田粒剤（モンガリット粒剤等）の処理も一定の防除効果があるが、銅剤にはやや劣る。なお、耐性菌の発達を防ぐため、シメコナゾール剤の同一年における連用は避ける。具体的な薬剤名は表1を参照。

表1 イネ稲こうじ病の主な防除薬剤

種類	散布時期	農薬名	成分名
育苗箱施用剤	移植3日前～当日	トリプルキック粒剤	シメコナゾール・トルプロカルブ・シアントラニプロロール
本田剤(粒剤)	出穂20～14日前	モンガリット粒剤	シメコナゾール
		モンガリット1キロ粒剤	シメコナゾール
		イモチミン粒剤	シメコナゾール・メミノストロビン
		ガッツスター粒剤	シメコナゾール・トルプロカルブ・ジノテフラン
		ゴウケツモンスター粒剤	シメコナゾール・トルプロカルブ・ジノテフラン
本田剤(粉剤)	出穂20～10日前	Zボルドー粉剤DL	銅
本田剤(液剤)	出穂20～10日前	ドイツボルドーA	銅
		ボルドー	銅

(2) 耕種的防除

過去に本病の発病がみられたほ場では、飼料用米専用品種等の本病に弱い品種の栽培は避ける。また、窒素肥料の過剰施用や遅い追肥をしない。発病穂は早めに抜き取り、ほ場外に持ち出す。